

## 批評と紹介

## ソウル大東洋史学科論集 第一輯

山根 幸 夫

韓国のソウル大学校人文大学に東洋史学科が創設されたのは、一九六九年のことで、第一回の卒業生は一九七三年三月に出ている。韓国における唯一の東洋史学科である。そのソウル大学東洋史学科で、去る七七年一月に『서울大東洋史学科論集』が創刊された。もちろん、韓国には以前から『東洋史学研究』という専門雑誌もあったが、今回『서울大東洋史学科論集』が刊行されるようになったことは、まことに同慶の至りである。

東洋史学科長の関斗基教授が、巻頭に「編集方針の説明」なる一文を寄せて、本誌創刊の趣旨を、次の如く述べている。

ソウル大学校東洋史学科学生たちの研究報告をあつめたこの論集を刊行する主要な目的は、我々の学科が何をどのようにに教授し、どのようにに学習研究しているかを、世界の先輩後輩たちにみてもらい、叱正されると同時に、より多くの関心を期待するためである。我が科の成長を

記録し、卒業生たちとの連帯関係を密接にしようとする目的と、副次的意義ではあるが——それにしても決して比重の軽いものではない——学生たちが作成し提出した研究報告が、指導教授や同級生だけがよむには、余りに多くの労力をかけているという意識も、この論集を企画することになった動機の一つである。ここにのせた研究報告中、博士・碩士課程在学生在が作成したものの中には創見のあるものもあり、多少でも学界に寄与することを希望するが、原則的にもこれら研究報告を作成するのに、筆者らは採りあげたテーマに関連する国内外の研究成果を総合して、読者の研究の基盤になるよう要請されている。問題の焦点を捕捉する訓練、史料処理の訓練、論文の構成と脚色に馴れる訓練などを積み重ねることによって、これら研究論文作成の主な目標にかなう。そこで、場合によっては指導教授の見解と一致しない研究報告もありうるが、ここにのせた論文も、指導教授の見解と決して統一されたものでないことを明白にしておく。ここにのせた研究報告は、構成や表現上の若干の修正を除いては、提出当時の原形を殆どそのままもっていることを併せて明らかにしておいた方がよからう。提出された研究報告は、その作成課程に於て論題選択から、構成、史料の取扱い、研究文献の処理など、指導教授の指導をう

けた。提出された研究報告に対する指導教授の批判、同学との討論は授業時間に全部行なわれたが、ここに発表するに当って、それらを反映させる余裕がなかった。

もう一つ明らかにしたいことは、ここにのせた研究報告が、他の学生たちのそれより著しくすぐれているということは決してない点である。各課程の学生の論文を一つにまとめなければならぬので、テーマの多様性、発表に關する時宜性、課程別の配分、原稿の長短、その他種種の点を考慮した末に、ここにのせるよう選定したのである。既に提出された研究報告中、本号にのせられなかったが、次号にのせるよう作成した何篇かがある。なお、関心のある人は、本論集に付録した学科活動報告にみえる論題を参照して、学科長に閲読を申し出ることが出来る。

付録にのせた「ソウル大学中央図書館所蔵中文雜誌（一九四九年まで）及び中文新聞目録」は、これら資料を必要とする分野の研究者に若干の助けになることと信ずる。これからも、このような研究便宜のための資料整理や稀貴資料を付録としてつづけるつもりである。本論集は当分年刊の形式をとるが、今後は教授陣の研究論文をも含めて、年二回程度は刊行できることを期待している。

右の如き関教授の説明によって、本論集が刊行されるよう

になった事情、またその編集方針も明らかになったであろう。博士・碩士・学部課程の学生の論文を、適当に按配して掲載されている点に、その教育的配慮がはつきりとうかがわれる。次に、本論集に掲載されている六篇の論文の筆者および題名を紹介してみよう。

李成珪（博士課程） 清初地方政治の確立過程と郷紳——順

治年間の山東地方を中心にして——

表教烈（碩士課程） 康有為の変法論と明治維新觀

崔晶妍（碩士課程） 辛亥革命と清朝——排滿と清朝の改革を

中心として——

崔熙在（学部課程） 明末紳士層の階層分化について

羅政洙（学部課程） 孫文の「聯蘇」と民生主義の深化

王載烈（学部課程） 孫文の「耕者有其田」論の理解——「平

均地権」と関連して——

右の題名によって明らかのように、本号に発表された論文は、明・清および民国初期に關するもので占められている。このような結果になったのは、指導教授に由る点も多く、殊に関教授の影響が多いのではないかと思われる。これらの論文を全部読んだわけではないが、最初の李成珪氏の論文など、かなり水準の高いものであり、どこに出しても決して恥しくない研究であるといえよう。

各論文に共通していえることは、日本の研究論文を実によ

く参照していることである。日本人の研究者でも見落すすようなものまで目を通してゐる。例えば、表教烈氏の「康有為の变法論と明治維新観」でも、拙論「戊戌变法と日本——康有為の明治維新把握を中心として——」（御茶の水書房『変革期の社会』所収）まで参照されている。このように日本の文献が利用されていることは、ソウル大学の東洋史学科の学生諸君は、いずれも日本語をマスターしているということであろう。わが東洋史研究者が殆どハングルを読めないという現実と思ひあわせて、反省してみる必要があるのではあるまいか。

李成珪、崔熙在両氏は、それぞれ郷紳・紳士をテーマに採りあげているが、紳士の問題については、かつて関教授がすぐれた研究を發表されたことがある（その翻訳は『明代史研究』四、五号に訳載）。わが国でも重田徳・小山正明・森正夫諸氏によつて、郷紳研究が進められてきたが、わが国の郷紳研究は理論構成が先行してしまつて、実証的裏付けに欠けている嫌がある。例えば「郷紳」の定義一つをとつてみても、共通の理解をもつていない。この点は、関教授の研究と比較してみれば、きわめて明瞭である。ところで、崔熙在氏の論文の場合、わが国の研究に依拠するところが多く、日本の郷紳研究の欠点を再生産しているおそれがある。筆者としては甚だ遺憾である。

それにつけても、韓国であらゆる種類の日本の文献を閲読することは容易なことでないであろう。もちろん、主要な史学関係の雑誌は入手されているであろうが、各大学の紀要、史学科の雑誌などは、蒐集しきれないであろう。例えば、王載烈氏は安藤久美子「孫文一派の土地国有論と辛亥革命」〔史艸九〕を、堀川哲男「民生主義をめぐる民報と新民叢報の論争」下（東洋史研究三四—一）から再引用している。できれば、わが東洋史研究者もソウル大学東洋史学科への寄贈、あるいは交換を考えても好いのであるまいか。

本号にのせられた論文から判断すれば、ソウル大学東洋史学科では、明清史および近代史しか研究していないように思われるかもしれないが、付録の「学科活動記録」から、ここ数年間の学部卒業論文を紹介して、そうでないことを明白にしておきたい。

学部第三回（一九七五年三月）

金世鎮 太平天国乱の性格

尹慧英 張謇研究

李鍾南 北魏末六鎮の叛乱に関して

李弘均 明治初期の日本の対外政策に関する一考察

韓振洙 宦官と自宮

全淑姫 満州事変の歴史的 성격

金舜圭 先秦の車戦

李順英 五四運動に関する試論的考察

表教烈 民生主義と孫文の思惟世界

朴鍾國 明末の復社運動について

学部第四回（一九七六年三月）

金舜圭 孫文の五権憲法について

李範鶴 司馬光と新法

申鍾烈 清末中国經濟の資本主義化

李玠夷 紳士の社会經濟的役割とその地主的性格

李寿悅 新文化運動に対する一考察

韓凡徳 清末變革期における經濟的改革思想に関する一考察

察

任大熙 唐代の軍制

李功洙 宋代科挙制度について

学部第五回（一九七七年三月、九月）

고대산 民生主義の歴史的性格——社会革命論の三段階變化

を中心に——

朴載憲 日本の門戸開放と美国——神奈川条約を中心にして

金千柱 明代里老人制の自治的機能に関する一考察

姜明喜 陳公博の革命觀——国民革命期を中心として——

金榮一 南京条約が中国貿易に及ぼした影響について

金裕哲 「淮南子」の思想研究——その折衷的立場的特質と

批評と紹介 山根

意義——

趙淵相 阿片戦争以前時期の広東貿易の分析

金点童 乾隆帝の統治思想

徐永大 匈奴の竜祠とその機能

金亨秀 天朝田畝制度の性格

鄭泰英 征韓論の成立背景——西郷隆盛を中心にして——

なお碩士（修士）論文の題目は次の如くである

一九七五年二月

李成珪 戦国時代統一論の形成とその背景

崔甲洵 前期清朝の農民統制——地主・佃戸関係に対する対

応——

一九七六年二月

曹秉漢 曾國藩の經世礼学とその歴史的機能——太平天国

と洋務運動を通じて——

吳相勲 黄巾乱に対する一考察——黄老術・逸民および任俠

と関連して——

以上のような卒業論文・修士論文の題名をみると、全体としてかなり變化に富んだものであり、その問題意識もわが国のそれと、それ程異なっていないことがわかる。但し、本号の巻頭論文を執筆している李成珪氏の修士論文が戦国時代を扱っていたのに対して、本号の論文は清朝初期を対象としている事実は、指導教授の関係があるかも知れないが、一般的

第六十卷 一六九

傾向として、ソウル大学では明・清および近代史への傾斜の様相がうかがわれる。なお、韓国では日本史もまた東洋史の分野に入っていることがわかる。

なお、ソウル大学の東洋史学科卒業生は、第一回（一九七三年）八名（女子一名）、第二回（七四年）九名（女子二名）第三回（七五年）一〇名（女子二名）、第四回（七六年）八名、第五回（七七年）一〇名（女子一名）、合計四五名である。七七年一二月現在で、卒業生中一〇名が大学院に在学している。

以上『東洋史学科論集』の紹介というよりも、ソウル大学東洋史学科の紹介になってしまったが、関教授の序文にもあった通り、本論集が早く半年刊になり、そして教授スタッフの研究論文も掲載されて、内容の充実した論集になることを期待してやまない。なお、不備な研究条件の下で、学生の研究指導に当っておられる高柄翹・関斗基両教授、呉金成助教の今後の御健闘を祈ってやまない。

（서울大東洋史学科論集第一輯、서울대학교人文大学東洋史学科発行、一九七七年一二月）

## 中山八郎教授頌寿記念明清史論叢 星博士退官記念中国史論集

三木 聰

昨年末から今年初にかけて、『中山八郎教授頌寿記念明清史論叢』（以下『中山論叢』と略称）及び『星博士退官記念中国史論集』（以下『星論集』）が、相継いで刊行された。中山八郎・星斌夫両氏とも、長年に亘って明清史研究発展のために活躍を続けてこられた関係から、『中山論叢』が明清史関係論文十三篇を収録し、『星論集』が全論文二十篇のうち、明清史関係論文十三篇に及んでいるごとく、両者とも明清史中心の論文集となっている。従って、明清史を研究テーマとする我々にとって、両論文集から裨益されるところ大なるものがある。

小稿では、評者の都合により明清史関係論文のみしか扱いていない。ここで扱う明清史関係論文は、内容的に多岐に亘っており、テーマ別に分類しにくい側面もあるが、一応大雑把に、民衆闘争、政治・制度、商業・財政などの枠組みを設けて、個々の論文についての紹介及び若干の感想を述べることにする。

まず民衆闘争史の分野には八篇の論文がある。森正夫「一